様式第２（第９条関係）

政務活動費成果報告書

令和　6　年　8　月　1　日

犬山市議会
議長　柴田浩行　　様

議員名　畑竜介　㊞

下記のとおり、行政視察の成果を報告いたします。

(1) 年月日	令和6年7月29日（月）～令和6年7月31日（水） （　2泊　3日）
(2) 場所	宮崎県日南市・鹿児島県霧島市・鹿児島県南九州市
(3) 形態	会派（創犬会　　）：その他（　　）
(4)内容	別紙
(5)成果・提言	別紙

犬山市議会
受付
6.8.-2

宮崎県日南市

視察項目：油津商店街へのIT企業誘致

内容

昭和40年頃は大変な賑わいであった商店街が、近年は猫も歩かないと言われるほどの閑散としていたが、当時の市長が商店街のシャッターを開ける為に、内需の循環がるミッションであるテナントミックスマネージャーと、外需の獲得がミッションであるマーケティングの専門家を外部登用。

このお二人のリーダーシップで、商店街には29店舗ものテナントが入居しIT企業も16社ほど誘致。

しかしながら、現在IT系企業は入居しているものの、小売りの商売が増えたわけでは無いので、昔の様な商店街としての賑わいは見られなかった。

商店街の復活という目線では上手くいっていない印象は否めないが、商店街の中に２００人～３００人の市内の若者が就業しているとの事で、若者の市外流出には一定の効果があったと思える。

一方で当時の市長が２期で引退され現在の市長になってからは、工場の誘致などIT企業誘致とは方向性の違う企業誘致を推進している為、今後の広がりは感じられない。

成果・提言

有効求人倍率が高くても若者が市外に流出している状況の中、多くあった工場などの仕事では無く、事務的な仕事を若者達は望んでいるという分析の結果でIT企業を誘致したという考え方は、まさしく民間的発想であり大切な考え方である。入居される企業に対しては日南市の給与水準よりも高い賃金設定をお願いするなど、若者が働きやすい環境を官民で作っており、通常よりもかなり突っ込んだ企業誘致を行っている。

犬山市でも企業誘致は行なっているが、工場誘致などで得られる固定資産税だけでなく、若者が求める・働きたくなるような企業誘致・職場を官民連携して作っていく為には、ベンチャー企業の支援や起業支援なども手厚くしていく必要がある。

鹿児島県霧島市

視察項目：移住・定住の促進について

内容

「2024 年版第 12 回住みたい田舎ベストランキング」南九州・沖縄エリアの総合部門において第１位を去年に引き続き２回目の獲得をされている。

霧島市が定住促進の取り組みを始めたきっかけとしては、約１２５，０００の人口の内 80%が市街地に住んでおり中山間地域での高齢化が進み、コミュニティ機能の低下・商店等の減少により生活サービス水準が低下し、地域を維持することが困難になっていることから、平成１８年より取り組みを開始。

施策の中心については移住定住促進補助制度による市域全域の空き家利活用。

市外から霧島市への転入に対する補助金はもちろんのこと、市内市街地から中山間地域への移住も補助対象としている。

また移住定住促進の為のきっかけ作りとして、2 泊 3 日の移住体験ツアーやそれぞれの方の希望に合ったオーダーメイド型の日帰り移住体験ツアー、そして ZOOM を使ったオンライン相談会など、入り口が多岐にわたり実施。

そして何より興味深かったのが、移住者同士のコミュニティが形成されていて、お互いのつながりも深く、移住者の方々が自ら情報発信をして下さっている事、市の移住定住促進政策にも非常に協力的であるという事。

移住者に関しても仕事で転勤することはあっても、霧島市に不満を持って出ていった方はほぼいないとの事。

移住定住促進の結果だけではないと思うが、人口自体も急激な減りは見られず、平成 7 年ころからほぼ横ばいである。世代別の人口動向については担当課が違う為、回答は得られなかった。

成果・提言

実際に犬山市を訪れていただく機会は観光の面では強みになるが、そこから何度も来ていただく仕組みづくり、また地域の方と触れ合える観光コンテンツなどをきっかけに移住などにつなげる為の連携が必要と感じる。移住体験ツアーなどを参考に日帰り観光だけではない新たな切り口も考える必要がある。

鹿児島県南九州市

視察項目：平和学習について知覧特攻平和会館

内容

知覧特攻平和会館は、昭和４０年ころに特攻関係者からの声により全国の特攻関係者や一般有志の方々に募金を呼びかけ建設を計画。昭和４９年に最初の特攻遺品館を建設。展示する資料も多くなり手狭になった為、昭和６１年に場所を移して新たに建設。更に、全国からの資料が続々と集められ平成３年に別館を増築。その後も増築や改築を繰り返し現在に至る。

特徴としては語り部による講和により実際の生の声を聞け、見るだけではなくより深く理解が出来る。

また、実際に特攻隊の方々が書いた手紙が当時のまま展示されており、内容も非常にリアルに感じることが出来、戦争の悲惨さを自分事と捉えることが出来る施設となっている。

一方で資料等は紙でできているものも多く、保存状態を維持していくのも課題であるとの事。

成果・提言

知覧特攻平和会館の語り部も高齢化しており、現在は戦争体験者の２世の方などが活躍しており、講和の内容が事実と祖語の無いように努力をされているが、当市においても市内の平和教育で講和頂いている方も高齢化しており、実際の話を聞く機会が減る事も考えられるため、知覧特攻平和会館に協力を得て犬山市内での講和や、もし持ち出せるものがあれば犬山市内でも展示をするなど、新たな平和教育の在り方を検討してみてはいかがか。